

ギェルツァプジェ・タルマリンチェンの推理論

——『解脱道解明』研究の覚え書き——

根本裕史

0 はじめに

ギェルツァプジェ・タルマリンチェン (rGyal tshab rje dar ma rin chen: 1364–1432) の『解脱道解明 (*Thar lam gsal byed*)』は、現在に至るまでゲルク派の学僧の間で読み継がれている『量評釈 (*Pramāṇavārttika*)』註釈の一つである。本稿は推理論に関連する重要な詩節『量評釈』I.15に対する註釈箇所を訳出し、「遍充の確立」の問題に関するギェルツァプジェの議論を提示すると共に、その議論の内容がゲルク派のデブン・ゴマン学堂において伝統的にどのように解釈されているか紹介するものである。筆者は2010年11月、デブン・ゴマン学堂に属するザンスカール出身の学者ロサン・ツルティム師 (Blo bzang tshul khriṃs)¹に『解脱道解明』の当該箇所を講読していただく機会を得た。翻訳に際してはロサン・ツルティム師の説明を参考にした。さらに、本稿ではロサン・ツルティム師による口頭の註釈を和文にした上で脚注に示すことにより、文献上には現れないデブン・ゴマン学堂の伝統的解釈の幾つかを資料として提示する。

1 ギェルツァプジェ推理論の概要

ダルマキールティ (Dharmakīrti: ca. 600–60) は『量評釈』I.15に対する自註 (*Svavṛtti*) の中で次のことを述べている。

「必然的關係なしには肯定的遍充の確定と否定的遍充の確定はない。それゆえ、まさにそれを説示なさるために、かの〔軌範師ディグナーガは〕確定ということ述べたのである。」²

ここでダルマキールティが述べようとしているのは、推理知を得るためには肯定的・否

¹ ロサン・ツルティム師は、ゴマン学堂に属する化身ラマ、クンデリン・タツァク・リンポチェ十三世テンジン・チューキギェルツェン (bsTan ḍzin chos kyi rgyal mtshan) の専属教師 (yongs ḍzin) という要職を務める学者である。2010年11月にロサン・ツルティム師が来日した際、広島の前野学堂日本別院 (龍蔵院) にて『解脱道解明』の当該箇所を講読していただいた。なお、2010年9月に筆者がデブン・ゴマン学堂 (ムンドゴッド) を訪れた際には、これに関連するジャムヤンシェーパの『証因学考究 (*rTags rigs mtha' dpyod*)』の本質証因 (rang bzhin gyi rtags) の節をロサン・ツルティム師の下で学ぶ機会を得た。

² PVSV 10.28f. (cf. PVSV D184a1f): na hy asati pratibandhe 'nvayavyatirekaniścayo 'sti / tena tam eva darśayan niścayam āha /

定的遍充の確定 (anvayavyatirekaniścaya)³が不可欠であり、それらの確定のためには論証されるべき属性と証因との間に必然的關係 (pratibandha) が成立していなければならないということ、そして、それこそがディグナーガ (Dignāga: ca. 480-540) の意図した事柄だということである。ギェルツァプジェはこの非常に短い文章の意味を説明するために、シヨル版にしておよそ7フォリオにわたる長い議論を展開している⁴。そこに説かれるギェルツァプジェの推理論は後代のゲルク派に大きな影響を与えた。例えば『量評釈考究 (rNam grel mtha' dpyod)』を著したジャムヤンシェーパ・ガワンツォンドウ (Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson grus: 1648-1721) は、そのギェルツァプジェの推理論について説明するために、タシキル版にして85フォリオ (153a3-238b2) にわたる長大な議論を展開している程である。

では、ギェルツァプジェの推理論とはいかなるものであるか。以下にその概要を示すことにしたい。

1.1 証因の三相

推理知とは必ず何らかの有効な証因 (rtags yang dag) に基づいて得られるものである。そして、その証因は次の三つの形 (tshul gsum, 三相) を取るものでなければならない。すなわち、主題属性 (phyogs chos)、肯定的遍充 (rjes khyab)、否定的遍充 (ldog khyab) である。主題属性とは「主題において必ず存在すると確定された証因」であり、肯定的遍充とは「同類のみ存在すると確定された証因」であり、否定的遍充とは「異類には決して存在しないと確定された証因」である。このようにギェルツァプジェの見解では、証因の三相とは「証因が具えるべき三つの条件」ではなく、有効な証因それ自体のことを意味するので注意が必要である。彼が三相は本体を同じくするもの (tshul gsum ngo bo gcig) であるというのは、そのような意味なのである。以上の三相解釈はケードゥプジェ・ゲレクペルサンポ (mKhas grub rje dge legs dpal bzang po: 1385-1438) やギェルワ・ゲンドゥンドゥプ (rGyal ba dge 'dun grub: 1391-1474) といった同時代のゲルク派の学者達にも共通して見られるものである⁵。

1.2 遍充の確立方法

ギェルツァプジェは『解脱道解明』の当該箇所 (20b6ff.) で証因の第二相と第三相、すなわち、肯定的遍充と否定的遍充がいかにして確立されるかについて論じている。彼によると、肯定的・否定的遍充の両者は「相互的に逸脱しないもの (phan tshun mi 'khrul ba)」であり、一方が知られば必ず他方も間接的に知られる (27a1)。では、肯定的遍充が知られるとはいかなることであり、否定的遍充が知られるとはいかなることであるか。それは

³ ダルマキールティ推理論における「確定 (niścaya)」の概念については Steinkellner 1988を参照。

⁴ 『解脱道解明』の当該箇所に展開される議論の原型は、ギェルツァプジェによって編纂されたツォンカバ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357-1419) の講義録『量の大備忘録 (Tshad ma'i brjed byang chen mo)』の中に見出される (Tshad ma'i brjed byang, 693.18ff.)。それゆえ、『解脱道解明』に説かれるギェルツァプジェの推理論はツォンカバに由来するものであると推測される。

⁵ ケードゥプジェにおける肯定的遍充と否定的遍充の解釈については Nemoto (forthcoming) を参照。

証因が同類にのみ存在すると確定されることであり、証因が異類には決して存在しないと確定されることである。

ここで「音声は無常である。作られたものであるゆえに」という論証を例に取れば、証因「作られたものであること」が同類「無常なもの」にのみ存在するという知識は、次のような三つの認識 (tshad ma gsum) を通じてもたらされる (21a5)⁶。

1. 常住性と無常性が直接対立 (dngos gal) することを確定する認識
2. 実例 (mtshan gzhi) としての「作られたもの」を確定する認識
3. 常住なものが作られたものであることを否定する認識

それぞれの認識の必要性について、詳しくは訳文と脚注に記した補足説明を参照されたい。この三つの内、特に重要なのは第三番目の認識である。その認識とは、否定されるべき属性(常住性)と証因(所作性)とが両立しないことを知る認識である。別の言い方をすれば、それは「およそ常住なものは作られたものではない (rtag na ma byas pas khyab)」ということ把握する認識、もしくは、「無常性がなければ所作性もない (mi rtag pa ldog stobs kyi byas pa ldog pa)」ということ把握する認識である。こうした認識は「常住なものは所作性を欠く。同時的にも継起的にも結果を生み出さないゆえに (rtag pa chos can / byas pas stong ste / rim dang cig car gyi don byed pas stong pa'i phyir /)」⁷という論証を通じてもたらされる。この論証は「常住なものは作られたものである」という間違った主張を退ける働きを有するので、この論証における証因は「拒斥証因 (gnod pa can gyi rtags)」と呼ばれ (21b4)、この論証によって起こる推理知は「拒斥推理 (gnod pa can gyi rjes dpag)」と呼ばれる (23a2)。

ギェルツァプジェによれば、拒斥推理は「必然的関係の意味 ('brel ba'i don ldog)」を知る認識と相関するものである (22b6)。ダルマキールティが説いているように、肯定的・否定的遍充を確定するためには、証因と論証されるべき属性との間に必然的関係 ('brel ba) が成立していなければならない。ギェルツァプジェによると、その関係の具体的内容とは [1]所作性が無常性とは異なっており (byas pa mi rtag pa las tha dad)、[2]無常性がなければ

⁶ ギェルツァプジェは『量決択大註』の中で、非依存の証因 (bltos med kyi rtags) に基づいて得られる推理知にも、その三つの認識を代用する機能 (tshad ma gsum po de'i dod thub) があるはずであると述べている (rNam nges 'fikka chen, 169a1f. Cf. Rigs rgyan, 88b4; rNam 'grel mtha' dpyod, 227b3ff.)。非依存の証因を用いた論証とは目下の論証における肯定的遍充を確立するための補助的論証であり、具体的には「作られたものはそれ自身が成立するや否や消滅することを本性とする。その消滅は自身より以後に発生する原因などに依存することなしに、自身〔を生み出す〕原因から消滅者として生起するゆえに (byas pa chos can / khyod rang grub tsaṃ nas 'jig pa'i ngo bo yin te / khyod 'jig par gyur ba rang las phyiṣ 'byung ba'i rgyu sogs la ltos pa med par rang rgyu las 'jig par skyes pa'i phyir /)」といったものである (sDe bdun rgyan, 158b4f. Cf. Tshad ma'i brjed byang, 692.18ff.; Rigs rgyan, 89a5)。この論証に関しては Nemoto 2011: 122ff. において考察した。

⁷ Tshad ma'i brjed byang, 693.6f. を参照。また、sDe bdun rgyan, 159a1f; Rigs rgyan, 89b3f. を比較参照。この論証に関しては Nemoto 2011: 124ff. において考察した。

所作性もない (mi rtag pa ldog stobs kyis byas pa ldog pa) ということである。この二項目のことをギェルツァブジェは「必然的関係の意味」と呼ぶ。そして、この二項目の内、後者を確定する認識こそが拒斥推理に相当するものである。

「必然的関係の意味」を確定する認識は肯定的・否定的遍充を知る認識よりも先に起こり、後者は前者に依存して起こる (22b6)。図示すれば以下の通りである。

1. 必然的関係の意味の確立

1a. 「所作性が無常性と異なること」の確立

1b. 「およそ常住なものは作られたものではない」ということの確立



2a. 肯定的遍充の確立

(= 「所作性は無常なものにのみ存在する」ということの確立)

2b. 否定的遍充の確立

(= 「所作性は常住なものに決して存在しない」ということの確立)

しかし、ここで1bと2bの間にはいかなる相違があるのかという疑問が起こるかもしれない。というのも、「およそ常住なものは作られたものではない」という命題と「所作性は常住なものに決して存在しない」という命題は、実質的に同一の事態を述べたものだからである。もしそうであるならば、一体なぜ1bは2bに先行して起こるといえるのであろうか (1bと2aについても同様の疑問が起こり得るであろう)。

この疑問に対し、ギェルツァブジェは認識的な観点から回答を与えている。彼によれば、1bと2bの最大の違いは、目下の論証における証因である「作られたものであること (所作性)」を主題として捉えているか否かという点にある。1bの時点では、認識者は「常住なもの」を主題として捉えており、未だ証因「作られたものであること」を主題として捉えていない。認識者は証因「作られたものであること」を主題として捉えた後 (byas pa khyad gzhir bzung nas) それが異類には決して存在しないことを確定したとき、はじめて否定的遍充の確立に至るのである (22b5)。同様のことは肯定的遍充についても言える。すなわち、認識者は証因「作られたものであること」を主題として捉えた後、それが同類にのみ存在することを確定したときに肯定的遍充を確立することができる。

以上のことから、ギェルツァブジェの見解では「およそ常住なものは作られたものではない (rtag na ma byas pas khyab)」ということが知られただけでは、否定的遍充が知られたことにならず、「およそ常住なものは作られたものではない」という言明だけでは、否定的遍充が完全に表現されたことにはならない。否定的遍充が知られるためには、証因「作られたものであること」を主題として捉えることが必要であり、否定的遍充を完全な形で表現するためには、「音声は作られたものである (sgra ni byas)」という言明も併せて提示し、目下の証因が「作られたものであること」であることを明らかにする必要がある (27a4)。要するに、否定的遍充を確立するというのは、証因「作られたものであること」が常住なものには決して存在しないと確立することであり、否定的遍充を完全な形で表現した言明とは「およそ常住なものは作られたものではない。例えば壺のように。音声は作られたものである」というものである。

さらにまた、「目下の論証において否定的遍充は何であるか」と問われたならば、ギェルツァブジェは「作られたものであること」が否定的遍充であると答えるであろう(26b5)⁸。この場合の「否定的遍充 (ldog khyab)」とは「異類から排除される属性 (mi mthun phyogs las ldog pa'i chos) によって遍充されるもの (khyab bya)」⁹ という意味であり、それが指し示すのは証因そのものなのである。

1.3 遍充の確立から論証対象の確立へ

以上見てきたように、認識者は1bの段階においては「常住なもの」を主題として捉え、それに所作性が決して随伴しないことを確定し、続いて2の段階においては「作られたものであること(所作性)」を主題として捉え、それが無常なものにのみ存在すること、常住なものには決して存在しないことを確定する。この認識者が次に行なわなければならないのは、「音声」を主題として捉え、それが常住性を欠くこと、もしくは無常に他ならないことを確定し、目下の論証対象についての知識を得ることである¹⁰。

1b. 必然的内容の意味の確立

(= 「およそ常住なものは作られたものではない」ということの確立)



2a. 肯定的遍充の確立

(= 「所作性は無常なものにのみ存在する」ということの確立)

2b. 否定的遍充の確立

(= 「所作性は常住なものに決して存在しない」ということの確立)



3. 論証対象についての推理知を獲得

(= 「音声は無常である」ということの確立)

これらの段階は必ず順次に起こるものであり、先行の認識が後続の認識を内包すること

⁸ ギェルツァブジェによれば「およそ作られたものは無常である」ということは当該の論証における肯定的遍充の具体的内容 (mtshan gzhi) ではなく、「およそ常住なものは作られたものではない」ということは当該の論証における否定的遍充の具体的内容ではない。いずれの具体的内容も「作られたものであること」である。仮に「およそ作られたものは無常である」ということを肯定的遍充とし、「およそ常住なものは作られたものではない」ということを否定的遍充とした場合、いかなる過失が生じるかについては25a3ff. の議論を参照。

⁹ ジャムヤンシェーパの語義解釈に従った。rNam grel mtha' dpyod, 211b6: khyod de sgrub kyi chos mi rtag pa med na khyod kyang ldog dgos shing / de sgrub kyi mi mthun phyogs las ldog pa'i chos mi rtag pa'i khyab bya yin pas na ldog khyab dang / (「その〔証因『作られたものであること』〕は当該の論証において〔論証されるべき〕属性である無常性がなければ、それも必ず排除され、当該の論証における異類から排除される属性である無常性の所遍であることから否定的遍充と言われ [...]。)

¹⁰ 厳密には、2a・2bと3の間に、証因が主題に必ず存在すること(主題所属性)を確認する段階、および、証因の三相を一度に想起する段階が起らなければならないが、ここでは便宜上省略する。

はない。つまり、必然的関係の意味についての理解が生じたとき、同時に論証対象までもが知られることはなく、遍充についての理解が生じたとき、同時に論証対象までもが確立されることもない。というのも、上の図式を見れば分かるように、1b、2、3の各段階に起こる認識はそれぞれ異なったものを主題として捉える別々の認識だからである。さもなくば、「音声は無常である。作られたものであるゆえに」という論証式に依拠して起こる推理知は、既に知られている事柄を再び捉える認識 (bcad shes) に過ぎないことになり、妥当な認識 (tshad ma) に必要な条件の一つ—すなわち、未だ知られていない事柄を明らかにするものであること—を充たさないことになってしまうであろう。

ゲルツァプジェにとって、推理知とは未知の対象を新たに知る認識であり、それまで断じられていなかった増益 (sgro dogs) を新たに断じる認識である (23a2ff.)¹¹。彼をはじめとしてゲルク派の学者達によれば、経量部等が認める無常 (刹那滅) の見解や、中観派が認める一切法無自性¹²の見解は、最初に推理を通じて獲得されるものであり、その推理は未知の事柄に関する知識を得る手段でなければならない。本稿で取り上げた『解脱道解明』に説かれる一連の議論は、そうした推理論の基礎付けをなすものである。

2 翻訳研究

[凡例]

- 『解脱道解明』のテキストはシオル版 (Zhol ed.) を底本とする。
- ゲルツァプジェ自身が与える科文 (sa bcad) に基づいて見出しを作成した。科文の番号振り (例: F3, G1, G2...) は Toyo Bunko 1997に従った。また、訳者の判断でさらなる小さな見出しを設け、その開始部にボールド体のタイトルを与えた。
- 訳文において原語を提示する際には () を用い、訳文を補って文意を取り易くする際には [] を用いる。
- ロサン・ツルティム師による口頭の教示を脚注に示す場合には、括弧内に「L, Nov. 25th 2010」等々の註記を加える。

¹¹ デブン・ゴマン学堂で受け入れられている解釈にしたがえば、肯定的遍充の確立 (すなわち、所作性が無常なもののみ存在すると確定されること) によって「およそ作られたものは無常である」ということが知られるとき、「作られたもの」の一種である音声を一辺倒に常住と捉える増益 (mtha' gcig tu rtag par dzin pa'i sgro dogs) は断じられるが、「音声は常住であろうか無常であろうか、おそらく常住であるに違いない」という疑惑としての増益 (the tshom gyi sgro dogs) は断じられない。後者の増益を断じるために、証因を適用して音声の無常性を推理することが必要である。それゆえ、肯定的遍充が確立されるだけで、論証対象「音声は無常である」も同時に知られるといったことにはならない。

¹² 『現観莊嚴論 (Abhisamayālamkāra)』およびハリバドラ (Haribhadra: ca. 730-95) の『註釈 (Vivṛti)』に対する復註『釈論真髓莊嚴 (rNam bshad snying po rgyan)』の中で中観自立派の離一多 (gcig du bral) の理論を註解する際にも、ゲルツァプジェは遍充の確定方法に関して『解脱道解明』と同様の考えを述べている (rNam bshad snying po rgyan, 13a3ff.)。

F3 有効な証因の実例の下で定義を確定する認識に関する詳論 [20b6]

第三。〔有効な証因の〕実例 (mtshan gzhi) の下で定義 (mtshan nyid) を確定する認識に関する詳論を二点より説明する。すなわち、G1証因の否定的遍充の成立が〔証因と論証されるべき属性との間の〕必然的關係 (*brel ba) に依存することの説明、G2当の必然的關係を確定する認識に関しての解説。

G1 証因の否定的遍充の成立が証因と論証されるべき属性との間の必然的關係に依存することの説明 [21a1]

第一に関して三点より説明する。すなわち、H1単に〔証因が〕異類に観察されないだけ (mi mthun phyogs la ma mthong tsam)¹³で否定的遍充が確立されるという考えに対する批判、H2批判を通じて確立される事柄、H3まとめ。

H1 単に証因が異類に観察されないだけで否定的遍充が確立されるという考えに対する批判 [21a1]

第一について I1否定的遍充の確立は必然的關係に依存すると軌範師ディグナーガがお認めになっていることについて、I2〔軌範師ディグナーガがそれを〕お認めにならないとするならば矛盾することについての説明、I3単に〔証因が異類に〕観察されないことを否定的遍充と見なす他派に対する批判〔の三点より説明する〕。

I1 否定的遍充の確立は必然的關係に依存すると軌範師ディグナーガがお認めになっていることについて [21a2]

第一について J1語義、J2考究〔の二点より説明する〕。

J1 語義 [21a2]

hetos triṣv api rūpeṣu niścayas tena varṇitaḥ /
asiddhaviṣvaparīthavyabhicārivipakṣataḥ //
gtan tshigs kyi ni tshul gsum laṅg // de yis ma grub bzlog don dang //
'khrul pa can gyi gnyen por ni // nges pa brjod par mdzad pa yin //

証因の三相のいずれ〔の定義〕についても、かの〔軌範師ディグナーガ〕は不確立〔因〕、逆の事柄〔を導く証因〕、逸脱性を有する〔証因〕となるのを否定するものとして「確定」ということを言及なさったのである。(PV I 15)

第一。知るべきこと—主題— (shes bya chos can) 〔は次のことである〕。否定的遍充の確立は〔証因と論証されるべき性質との間の〕必然的關係 (*brel ba)¹⁴に依存すると軌範師ディグナーガがお認めになっているというのは理に適ったことである。なぜなら、かの〔軌範師ディグナーガ〕は主題属性 (phyogs chos) のみでなく、有効な証因の三相のいずれの定

¹³ 「～だけ (tsam)」という限定詞によって除外されるのは「同類にのみ存在すると確定されること」および「異類には決して存在しないと確定されること」である (L, Nov. 25th 2010)。

義についても「確定」ということを言及なさっているからである。

かの〔軌範師ディグナーガ〕が三相のいずれの定義についてもそのように言及しているのには目的がある。「作られたものであること」を根拠に「音声が無常であること」を確立する場合に〔証因が〕不確立因であること、逆の事柄〔を導く〕矛盾因であること、逸脱性を有する不確定因であることなどを否定するものとして理解できるようにするためだからである¹⁵。

J2 考究 [21a5]

遍充を確定するために必要な三つの認識 [21a5]

第二。所作性（作られたものであること）が無常なものにのみ随伴することを確定するためには、次の三つの認識（tshad ma gsum）が必要なのであって、それ以上は必要でない。

1. 常住性と無常性が直接対立（dngos gal）することを確定する認識¹⁶
2. 実例（mtshan gzhi）としての「作られたもの」を確定する認識¹⁷
3. 常住なものが作られたものであることを否定する認識¹⁸

第一の認識の必要性 [21a6]

もし後者二つの認識しか起こらないならば、「法螺貝であること」は黄色いもの〔の領域〕にのみ随伴することが帰結してしまう¹⁹。なぜなら「法螺貝（であること）」は妥当な認識に基づいて成立し、青色のもの〔の領域〕に随伴することが否定される〔ゆえに、後者二つの条件を充たす〕からである。これは青色であることと黄色であることが直接対立することを確定する認識の欠如に起因する過失である。

第二の認識の必要性 [21a6]

もし第二の認識が起こらないならば、「認識対象でないこと（shes bya ma yin pa）」は無常

¹⁴ 「音声は無常である。作られたものであるゆえに」という論証を例に取れば、証因「作られたものであること」と論証されるべき属性「無常であること」の間には必然的關係が成立する。それはいかなることかといえ、所作性が無常性とは異なり（byas pa mi rtag pa las tha dad）、無常性がなければ所作性もない（mi rtag pa ldog stobs kyi byas pa ldog pa）ということである。その内、後半のことが確立されるならば、「およそ常住なものは作られたものでない」ということ、もしくは、証因が異類には決して存在しないということも確立される。

¹⁵ もし証因が主題に必ず属すると確定されないならばその証因は不確立因であり、証因が同類のみに存在すると確定されないならばその証因は矛盾因であり、証因が異類には決して存在しないと確定されないならばその証因は不確定因である。

¹⁶ すなわち、否定されるべき属性（dgag bya'i chos）と論証されるべき属性（sgrub bya'i chos）とが直接対立することを確定する認識のことである。ある二つの事柄が直接対立するということは、その二つ以外に第三の可能性があり得ないことを含意する。

¹⁷ すなわち、肯定的・否定的遍充を確定するに当たって、証因となるもの（例：「作られたもの」）を主題（khyad gzhi）として捉える認識のことである。

¹⁸ すなわち、証因と否定されるべき属性の共通基体（rtags dang dgag bya'i chos kyi gzhi mthun）が存在することを否定する認識のことである。

なもののみ随伴することが帰結してしまう²⁰。なぜなら常住性と無常性が直接対立することは確定され、その〔認識対象でないもの〕が常住であることは否定される〔ゆえに、第一と第三の条件を充たす〕からである。

（反論：）非存在である常住なもの（gzhi ma grub kyi rtag pa）を除外するならばそのような過失となるかもしれないが、石女の子といったものは常住である²¹。

（答え：）ならば「兎の頭には角がある」と言ったとしても、過失がないことになるではないか。

（反論：）そこには角は存在しないことが帰結する。なぜなら、もし存在するならば知覚可能であるはずなのに、実際には知覚されないからである。

（答え：）ならば、兎の頭の角は常に妥当な認識によって知覚されることが帰結する。なぜなら、それは常住なものだからである。ここで遍充が成立しないというならば²²、〔その

¹⁹ ここで想定される論証は「東方の法螺貝は黄色である。法螺貝であるゆえに（shar phyogs kyi dung chos can / ser po yin te / dung yin pa'i phyir /）」というものである。上述の三つの認識の内、もし第一の認識が起こらないならば「黄色であること」を論証されるべき属性と見なし、「青色であること」を否定されるべき属性と見なした上で、「法螺貝は黄色であるか青色であるかのいずれかであるが、それは青色ではないゆえに黄色である」といった誤解をすることが起こり得る。ロサン・ツルティム師によれば、これが起こり得るのはティーバの不調から起こる病気（mkhris nad）のため視界に入る物が黄色く見えてしまう患者が法螺貝の色（それは実際には白色である）を推論しようとしている状況においてである。なお、師によれば、ルンの不調から起こる病気（rlung nad）にかかった患者には、視界に入る物が青色に見えてしまう（L, Nov. 25th 2010）。

²⁰ ここで想定される論証は「音声は無常である。認識対象でないゆえに（sgra chos can / mi rtag pa yin te / shes bya ma yin pa'i phyir /）」というものである。ここでの証因「認識対象でないこと」に肯定的遍充は成立し得ない。なぜなら、肯定的遍充が確立されるためには「認識対象でないもの」を目下の主題として捉える（khyad gzhir bzung ba）認識が起こらねばならず、そのためには「認識対象でないもの」を確定する認識が必要であるが、そもそも「認識対象でないもの」はどこにも存在しないので、そのような確定は起こり得ない。というも、あるものが存在しないならば、それを確定する認識は起こり得ないから（khyod med na khyod nges byed kyi tshad ma med pa'i phyir）である。以上のことから「認識対象でないもの」を主題として捉えた上で、それが同類に存在するか否か吟味することは不可能である。肯定的遍充が成立するためには、証因は必ず存在性を有する何らかのものでなければならない（L, Nov. 25th 2010）。

²¹ この反論は証因「認識対象でないこと」が常住なもの領域からは排除されないということ（別の言い方をすれば、非存在でありかつ常住なものが存在するという）を前提とするものである。ダルマキールティは『量評釈』II 204cdにおいて「それ自体が消滅しないものを知者達は『常住』という（PV II 204cd: nityam tam āhur vidvāṃso yaḥ svabhāvo na naśyati // ; gang gi rang bzhin j'ig med pa // de la mkhas rnams rtag ces brjod //）」と述べている。これを典拠としてゲルク派では、消滅しないもの、あるいは、変化しないものを「常住」と呼ぶのだということ、そして、そのような常住なものが存在することを主張する。これを踏まえれば、非存在である「石女の子」は変化しないものなので「常住」の定義を充たすようにも思われる。そのため、反論者の見解は必ずしも外的なものではない。ロサン・ツルティム師の教示によれば、常住なものを厳密に定義すれば「その本体が消滅することのないもの（rang bzhin j'ig pa med pa）」ではなく、「その本体が消滅することのない法（rang bzhin j'ig pa med pa'i chos）」としなければならない（L, Nov. 25th 2010）。

ように言う人は] 知覚不可能なものの非知覚に基づく証因 (mi snang ba ma dmigs pa'i rtags) の意味を理解していないことになり²²、「壺は布である」と認めたとしても過失がないことになるであろう²⁴。〔もし「兎の頭の角は常に妥当な認識によって知覚される」という帰結を〕その通りに認めるならば、そこには角が常に存在することになる。なぜなら、そこには角が常に妥当な認識によって知覚されるからである。その通りであると認めるならば、そこに角は常に存在しないことになる。なぜなら、もし存在するならば知覚可能であるはずなのに、実際には知覚されないからである。

第三の認識の必要性 [21b4]

もし第三の認識が起こらないならば、「認識対象であること (gzhal bya)」は無常なものにのみ随伴することが帰結してしまう²⁵。なぜなら、〔証因の〕実例としての「認識対象」は妥当な認識によって確定され、常住性と無常性は直接対立すると確定される〔ゆえに、前者二つの条件を充たす〕からである。

肯定的・否定的遍充の確定について [21b4]

(反論:) ある当該の論証式における否定的遍充 (sbyor ba skor gcig gi ldog khyab) が確定されたからといって、必ずしも肯定的遍充が確定されるとは限らないことになる。なぜなら、拒斥証因 (gnod pa can gyi rtags) に基づいて起こる推理知²⁶によって、常住なものも所作性を欠くことが確定されるが、所作性が無常なものにのみ随伴することは確定されないからである²⁷。

(答え:) [これに対して以下の三点より] 説明しよう。K1 [証因が異類に] 観察されないことのみによって否定的遍充が確立されると主張する者達の考えがいかなるものであるかの説明、K2肯定的・否定的遍充の確立が必然的關係に依拠することの意味、K3三つの相が同一の本体のものであるか、本体を異にするものであるかについての説明。

²² 「兎の角が常住であるからといって、兎の角が常に妥当な認識によって知覚されるわけではない」というならば、という意味である。

²³ もしある人が「兎の角は常に妥当な認識によって知覚されない (ri bong rwa rtag par tshad mas ma dmigs) けれども常住なもの (rtag pa) である」と言うならば、その人は知覚不可能なものが存在することを断言していることになる。しかしながら、知覚不可能なものに関して「ある」とも「ない」とも断言することはできない。これが「知覚不可能なものの非知覚」という理論の教える所である。

²⁴ もしある人が「兎の角は常に妥当な認識によって知覚されないけれども、兎の角は常住のものである」と言うならば、その主張は「壺は常に布として知覚されないけれども、壺は布である」というのと同じくらいに不合理なものである。

²⁵ ここで想定される論証は「音声は無常である。認識対象であるゆえに (sgra chos can / mi rtag ste / gzhal bya yin pa'i phyir /)」というものである。証因「認識対象であること」は同類「無常なもの」に存在するだけでなく、異類「常住なもの」にも存在することから、肯定的遍充が成立しない。

²⁶ 拒斥証因を適用した論証とは「常住なものは所作性を欠く。同時的にも継起的にも結果を生み出す作用を欠くゆえに (rtag pa chos can / byas pas stong ste / rim dang cig car gyi don byed pas stong pa'i phyir /)」というものである。

K1 証因が異類に観察されないことのみによって否定的遍充が確立されると主張する者達の考えがいかなるものであるかの説明 [21b6]

第一。軌範師ディグナーガの弟子でありながらも〔師ディグナーガの〕著作を良く理解していない者達や、他宗派の者達は次のように考える。

単に証因が異類に観察されないこと (rtags mi mthun phyogs la ma mthong tsam) こそが〔異類からの〕排除なのであって、その否定的遍充が確立されるかどうかは、その〔異類〕に存在しないと確定されるかどうかには依らない。なぜなら、仮にそうであるならば、異類全体〔のいずれか〕に〔証因が〕存在する場合〔その証因は〕知覚可能であるはずであり、ある基体 (gzhi) にある属性 (chos) がいないことを確定するためにはまずその基体を確定する必要があるが、証因が排除される基体 (rtags khegs pa'i gzhi) となる異類の全ての種 (mi mthun phyogs kyi gsal ba'i dbye ba mtha' dag) は存在するにしても対論者 (phyir rgol)²⁸にとって知覚不可能だからである。したがって、証因と否定されるべき属性との共通基体 (gzhi mthun) が観察されないだけで充分であり、共通基体が存在し得ないと観察される必要があるとするならば、過大適用の過失²⁹となる。

このように考えた上で、軌範師〔ディグナーガ〕の弟子達は

1. 単に〔異類に〕観察されないという意味での〔異類からの〕排除
2. 単に同類に観察されるという意味での〔同類への〕随伴
3. 主題の属性であること
4. 三相のいずれもが妥当な認識を通じて確定されること
5. 反対主張を確立する妥当な認識が起こらない一群のものとして意図されること
6. 主張命題に対する妥当な認識による拒斥が起こらない対象と関係すること

²⁷ この反論者は「証因が異類に観察されないことのみ (ma mthong ba tsam) によって証因の異類からの排除が知られる」ということを前提に論駁を提起している。さらに、反論者は「作られたものであるならば必ず無常であるということ (byas na mi rtag pas khyab pa)」が肯定的遍充の具体的内容であり、「常住であるならば決して作られたものではないこと (rtag na ma byas pas khyab pa)」が否定的遍充の具体的内容であると考えている。反論者によれば、否定的遍充は拒斥証因を用いた論証を通じて理解されるが、その理解は証因「作られたものであること」と論証されるべき属性「無常であること」の間の必然的關係に裏付けられたものではなく、証因が異類「常住なもの」に観察されないことから起こるものである。証因が異類に単に観察されないというだけでは、証因が同類のみに随伴することは知られないので、反論者にしがたえば「否定的遍充が確定されたからといって、必ずしも肯定的遍充が確定されるとは限らない」ことになる。なお、ゲェルツァブジェ自身は「ある論証式における否定的遍充が確立されるならば、必ず肯定的遍充も間接的に確立される」と考えている。

²⁸ 未だ論証対象を知らず、今からそれを知ろうとしている者のことである。

²⁹ この反論者の考えを代弁すれば次の通りである。もし証因が異類に決して存在しないと確定される必要があるとするならば、異類に含まれる全ての種のを逐一取り上げて、その一つ一つに証因が存在しないことが確定されねばならないが、そのためにはまず、異類に含まれる一切のものを知らないなければならない。しかし、もしそうであるとするならば、仏陀の一切智といった特殊な智慧がない限り、否定的遍充の確立は不可能であることになってしまう。

という六つの相を認める。しかし、これらは明らかに「肯定的・否定的遍充の確立は必然的關係に依存する」という理論を正しく理解なさっていないことの現れである。

K2 肯定的・否定的遍充の確立が必然的關係に依拠することの意味 [22a5]

二種の必然的關係（因果關係・同一關係） [22a5]

第二。評釈作者〔ダルマキールティ〕が

「全ての非知覚が非存在を知らしめるというわけではない。それゆえ、一方の排除によって他方も排除されることを認める者は、その両者の間に何らかの本質的結合關係があることもまた認めるべきである。さもなければ、証因は知らしめるものでないことになってしまうであろう。」³⁰

とお説きになり、また、

「必然的關係なしには肯定的遍充の確定と否定的遍充の確定はない。それゆえ、まさにそれを説示なさるために〔軌範師ディグナーガは〕確定ということ述べたのである。」³¹

云々とお説きになったご意図について幾許か解説することにしよう。ここで概して必然的關係（*'brel ba*）というものが〔いかなるものであるか〕確認されたならば、三種の証因の分類は、望むと望まぬとにかかわらず受け入れなくてはならないものとなる。

まず、煙が火と関係することは「それと異なっており、それがなくなることによって〔自身も〕なくなるゆえに」という根拠に基づいて成立する。そして、火がなくなれば煙もなくなることは一般に知覚（*mngon sum*）に基づいて確立されるが³²、ある事例においては果たして煙もなくなるか否か疑念が生じて証因に基づいて確立〔しなければならぬこともある。その〕場合には原因の非知覚（*rgyu ma dmigs pa*）〔という証因〕が必要である³³。あるいはさらに、火と煙の間の随伴關係が知覚に基づいて確定されたとしても、ある事例に関しては火が存在するか否かという疑念を退け〔なければならぬこともある。そのような〕場合に結果証因が必要である。

同様に、シンシャパーと樹の間の必然的關係が確立されることにより、能遍の非知

³⁰ PVSV D183b8f. からの引用。Cf. PVSV 10.22ff.: *na sarvānupalabdhir gamikā / tasmād ekanivṛṭṭyā anyanivṛṭtim icchatā tayoh kaścīt svabhāvapratibandho apy eṣṭavyaḥ / anyathā agamako hetuḥ syāt /*

³¹ PVSV D184a1f. からの引用。PVSV 10.28f.: *na hy asati pratibandhe 'nvayavyatirekaniścayo 'sti / tena tam eva darśayan niścayam āha /*

³² 火と煙はいずれも色法であるので、感官知によって捉えられる対象である。すなわち、触処である火は身識の対象であり、色処である煙は眼識の対象である。さらに、ゲルク派の学者達によると、火の非存在（*me med pa*）および煙の非存在（*du ba med pa*）は絶対否定（*med dgag*）と呼ばれる存在様式を有するものである。それらは分別を通じて知られるものであり、直接的に知覚されるものではないが、火のない場所を捉える眼識や煙のない場所を捉える眼識によって間接的に理解（*shugs rtogs*）され、知覚されるものでもある（L, Nov. 25th 2010）。

³³ 霧が発生している夜間の海を船で進行しているとき、目の前にあるものが霧であるか煙であるか判然としないうことが起こり得る。そのような場合「火の存在しない夜間の海に煙は存在しない。火が存在しないゆえに（*me med mtshan mo'i rgya mtsho na chos can / du ba med de / me med pa'i phyir /*）」といった論証式を構成して「煙の非存在」を推理することができる。

覚 (khyab byed ma dmigs pa) [という証因]³⁴と本質証因とが成立する。

所作性が無常性と関係することの意味 ('brel ba'i don ldog) を構成する一要素である「その両者の異なり」は知覚に基づいて確立され³⁵、「無常性がなければ所作性もない」という在り方は、無常性が存在しない基体 (gzhi) に所作性 [が存在すること] を否定する拒斥証因 (gnod pa can gyi rtags) に依拠して確立される。すなわち、先に肯定的遍充の確立のために三つの認識が必要であると説明した内の最後のものである。

肯定的・否定的遍充の確立 [22b5]

肯定的・否定的遍充 [の確定] とは証因の実例 (rtags kyi mtshan gzhi) である「作られたものであること」といったものを主題として (gzhir bzung nas) まさにそれが同類のみに存在すると確定されること、そして、異類には決して存在しないと確定されるというそのことである³⁶。そして、その [確定] に際しては、上述の「必然的関係の意味」を確定することが先に起こらなくてはならない³⁷。

(反論：) もし、およそ常住なものは所作性を欠く (rtag pa byas stong) と確定されたならば、所作性が無常なものにのみ随伴すると確定されないのは矛盾するので、「必然的関係の意味」の確定が先行することには依存しないのではないか³⁸。

³⁴ ここで想定される論証は例えば「樹の生えていない岩だらけの断崖にシンシャパーは存在しない。樹が存在しないゆえに (shing med pa brag ngos na chos can / sha pa med de / shing med pa'i phyir /)」といったものである。

³⁵ 所作性と無常性との異なりは自己認識 (rang rig) に基づいて確立される。すなわち、所作性を捉える分別を経験する自己認識 (byas pa dzin pa'i rtag pa nyams su myong ba'i rang rig) に所作性の形象は顕れるが無常性の形象は顕れず、反対に無常性を捉える分別を経験する自己認識 (mi rtag pa dzin pa'i rtag pa nyams su myong ba'i rang rig) に無常性の形象は顕れるが所作性の形象は顕れない。このようにして一方の形象を捉える自己認識に他方の形象が顕れないことを根拠に、両者が同一の本体のものでありつつ、概念として異なりを有すること—このことをチベット語では ngo bo gcig la ldog pa tha dad と表現する—が知られる (L, Nov. 25th 2010)。

³⁶ ロサン・ツルティム師によると、ここでゲェルツァブジェが述べているのは「肯定的・否定的遍充がいつ確定されるか (rjes su gro ldog gi khyab pa nges pa'i tshad)」ということである。すなわち、肯定的遍充が確定されるとき (rjes khyab nges tshad) とは、証因「作られたものであること」が同類のみに存在すると確定されたときであり、否定的遍充が確定されるとき (ldog khyab nges tshad) とは、証因「作られたものであること」が異類には決して存在しないと確定されたときである (L, Nov. 26th 2010)。むしろ原文の中に nges tshad という語は存在しないが、今の一文が『量評釈自註』(PVSV 10.28f.; PVSV D184alf) を説明したものである点を考慮するならば、nges tshad という語を補う解釈には合理性があると言えよう (PVSV 10.28f.: na hy asati pratibandhe 'nvayavyatirekaniścayo 'sti / tena tam eva darśayan niścayan āha / 「必然的関係なしには肯定的遍充の確定と否定的遍充の確定はない。それゆえ、まさにそれを説示なさるために〔軌範師ティグナーガは〕確定ということを述べたのである。))。また、ゲェルツァブジェの解釈にしたがえば、証因「作られたものであること」こそが当該の論証における肯定的遍充 (肯定的な様式で [論証されるべき属性によって] 遍充されるもの) であり、なおかつ否定的遍充 (否定的な様式で [論証されるべき属性によって] 遍充されるもの) である。それゆえ、nges pa や nges tshad といった言葉を補って「肯定的・否定的遍充 [の確定] とは…」としない限り、上の一文はゲェルツァブジェ自身の見解と適合しないものとなってしまおう。

(答え:)ならば、継起的にも同時的にも結果を生み出す作用を欠くこと—主題—は所作性が常住なものに存在しないことを確立する有効な証因であることになる。常住なものは所作性を欠くと確立する有効な証因であるゆえに。その通りであると認めるならば、〔継起的にも同時的にも結果を生み出す作用を欠くことは、その場合の主題である〕所作性(もしくは作られたもの)において提示様式に見合った形で (god tshul ltar)³⁷ 成立することになってしまおう⁴⁰。

推理知の獲得と増益の排除をめぐる疑問 [23a2]

さらにまた、常住なものは所作性を欠くと確定するその拒斥推理 (gnod pa can gyi rjes dpag) によって、常住なものの全ての種 (rtag pa'i gsal ba'i dbye ba mtha' dag)⁴¹ に関して「[およそ常住なものは] 所作性を欠く」という遍充が確定されるであろうか、されないであろうか。もし確定されるならば、「意志的努力の所産であれば必ず無常である」という遍充

³⁷ 証因「作られたものであること」と論証されるべき属性「無常であること」の間には必然的關係 ('brel ba) が成立する。その必然的關係の意味 ('brel ba'i don ldog) は所作性が無常性とは異なっており (byas pa mi rtag pa las tha dad)、無常性がなければ所作性もない (mi rtag pa log na byas pa log pa) ということである。「必然的關係の意味」を構成する二つの要素の内、前者は自己認識を通じて知られ、後者は拒斥証因を用いた論証によって確立される。拒斥証因を用いた論証を通じて知られるのは「およそ常住であるものは決して作られたものではない」という事柄であるが、この理解が起る段階では、証因「作られたものであること」を主題として捉えた上で (byas pa khyad gzhir bzung nas) それを「同類にのみ存在する」あるいは「異類には決して存在しない」と確定するには至っていないので、未だ肯定的・否定的遍充の確定は起らない。このように「必然的關係の意味」を知る段階と、肯定的・否定的遍充を知る段階とでは、証因「作られたものであること」を主題として捉えているか否かという違いがあり、前者の知は後者の知に先んじて起る。

³⁸ 反論者の見解によれば「およそ常住なものは作られたものでないこと」(A) が否定的遍充であり、「およそ作られたものは必ず無常であること」(B) が肯定的遍充である。彼の考えでは、A が確定されるならば否定的遍充が知られることになり、否定的遍充が知られたならば肯定的遍充も同時に知られるはずなので、B も確定される。それゆえ、A の理解が B の理解よりも先に起るのではなしに、A の理解と B の理解は同時に起るはずなので、「必然的關係の意味」を確定(そのためには A の理解が必要である)した後、肯定的遍充の理解(すなわち、B の理解)が得られるというのは不合理であると反論者は考える。

³⁹ 提示様式には述定形式の提示 (yin god) と存在形式の提示 (yod god) の二種がある。主題を P、論証されるべき属性を S、証因を H と記号化すれば、論証が述定形式(「P は S である。H であるゆえに」)の場合、主題所属性が成立するためには、P は必ず H であることが必要であり、論証が存在形式(「P に S が存在する。H が存在するゆえに」)の場合、主題所属性が成立するためには、P には必ず H が存在することが必要である。

⁴⁰ もし上述の帰結が認められるならば、「所作性(もしくは作られたもの)は常住なものには存在しない。継起的にも同時的にも結果を生み出す作用を欠くゆえに (byas pa chos can / rtag pa la med de / rim dang cig car gyis don byed pas stong pa'i phyr l)」という論証が妥当なものであることになる。もし仮にこの論証に妥当性があるとするならば、証因「継起的にも同時的にも結果を生み出す作用を欠くこと」は主題「所作性」(もしくは「作られたもの」)に必ず所属すること(主題所属性)が成立することになってしまうが、当然そのような不合理な帰結は認められない。

を確定するその妥当な認識によって、意志的努力の所産の全ての種に関して「〔意志的努力の所産であれば〕必ず無常である」という遍充が確定されることになる。しかし、もしその通りに認めるならば、「意志的努力の所産であること」を根拠にして意志的努力から生じた音声（例えば法螺貝の音）が無常であることを確立する際、肯定的遍充が確定されれば論証対象までもが成立することになってしまう⁴²。

もし先程のそれは確定されないとするならば、拒斥推理を起こしているが未だ論証対象を確定していない〔段階に達している〕対論者は、ある種の常住なものに所作性が随伴するのではないかという疑念を抱くであろうか、抱かないであろうか。もし疑念を抱くならば、常住なものは所作性を欠くと確定する妥当な認識によって、肯定的・否定的遍充が一体どのようにして確定されるのか考えてみるが良い⁴³。

上記のこれらの吟味の結果、そうした過失に陥るのであるからには、その妥当な認識によって、常住なものの全ての種に関して「所作性が随伴する」と捉える増益は断じられるのだと認めねばならない⁴⁴。そうした場合、「およそ意志的努力の所産であれば必ず常住性を欠く」ということを確定するその妥当な認識により、意志的努力の所産の全ての種に関して常住性の存在〔を捉える〕増益が必ず断じられるはずであるが、もしそうであるなら

⁴¹ 例えば虚空は「常住なもの」という類（spyi）に含まれる種（gsal ba'i dbye ba/bye brag）である。というのも、[1]虚空は常住であり、[2]虚空は常住なものとの間に同一性の関係（bdag gcig tu 'brel）を有し、[3]虚空でなく、かつ常住であるような事例が複数存在するという三つのことが成立するからである。ロサン・ツルティム師にしたがえば、あるものが常住であるからといって、それは必ずしも「常住なもの」という類を構成する種の一つであるとは限らない。例えば認識対象（shes bya）は常住であるが、常住なものの種（rtag pa'i gsal ba'i dbye ba）ではない。もし仮にそうであるならば、認識対象は上記のような三条件をいずれも満たさねばならず、それゆえ、認識対象ではなく、かつ常住であるような事例が複数存在すること（shes bya ma yin zhing rtag pa yin pa'i gzhi mthun pa du ma yod）になるが、そうした事例は一つも存在しないからである（L, Nov. 26th 2010）。

⁴² 「法螺貝の音は無常である。意志的努力の所産であるゆえに」という論証に基づいて推理知を得ようとする場合、結論「法螺貝の音が無常であること」を知る前に「およそ意志的努力の所産であれば必ず無常である」という遍充をまず確定しなければならない。しかし、この遍充の理解は結論の理解を内包することにならないだろうか、というのがここで提示される疑問である。

⁴³ 拒斥証因を用いた論証を通じて「およそ常住なものは作られたものでない」ということが知られたとき、ある種の常住なものは原因から作られたものであるという可能性をなおもって信じるのであれば、一体どのようにして肯定的・否定的遍充が確定されるであろうか、というのがここで提示される疑問である。

⁴⁴ 常住なものの全ての種に関して「所作性が随伴する」と捉える増益とは、それら（例えば虚空）を一辺倒に「作られたものである」と捉えてしまう増益（mtha' gcig tu byas par dzin pa'i sgro dogs）のことである。拒斥証因に基づく論証を通じて、およそ常住なものは所作性を欠く（rtag pa byas stong）ということが確定される時、常住なものの全ての種（例えば虚空）に関して「所作性が随伴する」と捉える増益は断じられるが（byas pa jug par dzin pa'i sgro dogs gcod）、常住なものの全ての種（例えば虚空）に関して「作られたものである」と捉える増益は断じられない（byas par dzin pa'i sgro dogs ma gcod）。もし後者の増益が断じられるとするならば、同様の論理により、「およそ意志的努力の所産であるものは無常である」と確定されるだけで、意志的努力から生じた音声が無常であることも知られることになるので、肯定的遍充が確定されれば論証対象までもが知られることになってしまう（L, Nov. 26th 2010）。

ば、「意志的努力から生じた音声」についても必ず増益は断じられるはずであるので、肯定的遍充を確定する妥当な認識によって、論証対象に関する増益⁴⁵が断じられることになる。もしこのように言うならば、まさしくその通りである (dod pa kho na)⁴⁶。

推理知は再認識であるか [23b1]

(反論：) ならば、「意志的努力から生じた音声」が無常であることを知る推理知—主題一は〔既に知っている事柄を捉える〕再認識 (bcad shes) であることになる。自らを導き出す先行の妥当な認識によって増益が断じられた後⁴⁷、その働きの衰えない内にまさにその同じ対象に関して再度改めて増益を断じる認識であるゆえに。

(答え：) 遍充が成立しない。〔ある認識が〕再認識であるためには、先行の妥当な認識によって既に知られている対象に働きかけるものであることが必要なものであって、既に増益が断じられている所の対象〔に関して再度改めて増益〕を断じるというだけでは不十分である⁴⁸。

(反論：) 「意志的努力から生じた音声」が無常であることを知る推理知は〕既に知られている対象に働きかけるものであることも受け入れるべきである。証因「意志的努力の

⁴⁵ この場合の「増益」とは「意志的努力から生じた音声は常住である」と一辺倒に捉える増益のことである。肯定的遍充が確定された時点においてそうした増益は断じられるが、「意志的努力から生じた音声は常住であろうか無常であろうか、おそらく常住であるに違いない」という疑惑としての増益 (the tshom gyi sgro dogs) が断じられていないため、未だ論証対象の確定に至ることはない。(L, Nov. 26th 2010)。

⁴⁶ ロサン・ツルティム師が教示するデプン・ゴマン学堂での標準的な解釈にしたがえば、ゲェルツァプジェが自身の見解として認めるのは次の事柄である。まず、拒斥証因を用いた論証を通じて「常住なものは決して作られたものではない」ということが一般的な形式で確定される時、「常住なもの」という類に含まれる全ての種に着目しているわけではないので、その一つ一つが作られたものでないことは確定されない。では、その時点において「ある種の常住なものは作られたものなのではないか」という疑念が起り得るかと言え、そのような疑念は起り得ない。なぜなら、拒斥証因に基づく論証により、虚空などといった全ての常住なものに関して、それらを一辺倒に「作られたものである」と捉える増益 (mtha' gcig tu byas par dzin gyi sgro dogs) が断じられるからである。つぎに、肯定的遍充が確定されたとき「およそ作られたものは無常である」ということが知られるが、そのとき論証対象「音声は無常である」も同時に知られるかといえ、そうではない。なぜなら、その段階では「作られたもの」の一種である音声を一辺倒に「常住である」と捉える増益は断じられるが、「音声は常住であろうか無常であろうか、おそらく常住であるに違いない」という疑惑としての増益 (the tshom gyi sgro dogs) が断じられていないからである。後者の増益を断じるためにこそ、証因を適用して音声の無常性を推理することが必要なのである (L, Nov. 26th 2010)。

⁴⁷ 「自らを導き出す先行の妥当な認識」とは肯定的遍充を確定する妥当な認識のことである。その認識によって断じられる増益とは「意志的努力から生じた音声は常住である」と一辺倒に捉える増益のことである (L, Nov. 26th 2010)。

⁴⁸ 肯定的遍充を確定する妥当な認識によって「意志的努力から生じた音声は常住である」と一辺倒に捉える増益は断じられるが、その時点においては未だ「意志的努力から生じた音声は無常である」という結論は知られていない。それゆえ、その認識に後続して起こる推理知は、未知の事柄を新たに把握する妥当な認識 (tshad ma) であって、再認識ではない (L, Nov. 26th 2010)。

所産であること」に基づいて「意志的努力から生じた音声」が無常であることを確立するときの証因の相を認識する妥当な認識—主題—は「意志的努力から生じた音声」が常住性を欠くことを知るものであることになる。「意志的努力から生じた音声」に着目 (blo kha phyogs) しており、それを常住と捉える増益を断じるゆえに。というのも、主題所属性についての認識がそれに着目しており、遍充についての認識によって増益が断じられるからである。

(答え:) 遍充が成立しない。なぜなら、それを知るためには必ずその「意志的努力から生じた音声」について、「常住性を欠くもの」という限定的属性の基盤となる主題 (khyad par gyi gzhi chos can) として着目しなければならないが、〔証因の三つの〕相を認識する妥当な認識にそのことは起こらないからである⁴⁹。

遍充の確定と否定対象の排除の相違 [23b5]

(反論:) さらにまた、常住なものは所作性を欠くと確定するその妥当な認識によって、常住なものは必ず全ての種の所作性⁵⁰を欠くという遍充は確定されるであろうか、されないであろうか。もし確定されるならば「あるものが作られたものであるならば、それは必ず常住性を欠く」という遍充を確定するその妥当な認識によって「〔あるものが作られたものであるならば〕それは必ず音声の常住性を欠く」という遍充も確定されることになる。しかし、その通りであるならば、肯定的遍充が確定されるだけで否定対象⁵¹までもが退けられることになってしまう。一方、先程のそれは確定されないとするならば、拒斥推理を起こしているが未だ論証対象を確定していない〔段階に達している〕対論者は、ある種の所作性が常住なものに随伴することを疑っている〔ことになり、そのように捉えてしまう〕増益を断じる他の妥当な認識もないので、肯定的・否定的遍充を確定する機会 (go skabs) がなくなってしまう。

(答え:) 過失はない。その妥当な認識⁵²によって、常住なものは全ての種の所作性を欠くことが確定されるにしても、肯定的遍充が確定されたからといって否定対象が退けられることにはならない。なぜなら肯定的遍充を確定するその妥当な認識によって、主題「作られたもの」に関しては「音声の常住性を欠く」ということが成立するけれども、「音声」

⁴⁹ 遍充を確定する認識によって「意志的努力の所産は常住である」と捉える増益が断じられ、主題所属性を確定する認識によって目下の主題「意志的努力から生じた音声」に着目することがなされるが、この二つの認識は別々に起こるものであり、単独の認識によってその二つのことが行なわれるわけではない。しかし、「意志的努力から生じた音声」を「常住性を欠くもの」という限定的属性の基盤となる主題として捉えるためには、その二つのことを同時に行なう単独の認識が必要である。その認識とは三相の確定に後続して起こる推理知に他ならない。三相を確定する時点においては、「常住性を欠くもの」という限定的属性の基盤となる主題として「意志的努力から生じた音声」に着目するには至っておらず、それゆえ「意志的努力から生じた音声は無常である」という結論は未だ知られていない (L, Nov. 26th 2010)。

⁵⁰ 例えば「音声の所作性」や「壺の所作性」などである。

⁵¹ すなわち、「音声が常住であること」である。

⁵² すなわち、常住なものは所作性を欠くことを確定する認識である。

を主題として捉えて常住性が退けられるわけではないからである⁵³。

常住性一般を否定することによって全種の常住性が否定されるか [24a3]

(反論:) 以下のように問われるべきである。およそ存在する限りの認識対象と同じ数だけ常住なものも存在するので⁵⁴、音声が常住性を欠くことを知る推理知が起こるとき〔音声か〕常住性一般 (rtag pa tsam) を欠くことは確定されるけれども、壺や布における常住性〔を持つものとして成立しないこと〕や、ヴェーダやピワン (擦弦楽器) の音声の常住性〔を持つもの〕として成立しないことは知られない。それゆえ、その音声はある種の常住性〔を持つ〕ものとして成立しているのではないかという疑念が起り得る。さらに、音声を認識するその妥当な認識によって、その音声が一般に「音声でないもの」ではないことが理解されるけれども、音声以外のもの〔の具体例〕である壺や布などでないことは理解されないので、一辺倒に (mtha' gcig tu) 音声に他ならないとは確定されないことになる。このように述べたとき、一体どのように答えるつもりか。〔それゆえ〕主題「音声」を一般に常住なもの (rtag pa tsam du) と捉える増益が断じられたならば、「常住」という概念によって特徴付けられる常住なもの全ての種 (rtag pa'i ldog pas khyad par du byas pa'i rtag pa'i gsal ba'i dbye ba mtha' dag)⁵⁵を対象とする増益⁵⁶が必ず断じられるはずである。そして、常住性一般を欠くことが確定される場合にも、その概念によって特徴付けられる全ての種のもを欠くことが必ず確定されるはずである。さもないければ、凡夫 (tshu rol mthong ba) はいかなる対象に関しても増益を断じることができないことになり、また、証因が〔異類に〕観察されないだけで否定的遍充が成立するということを認める学問体系が正しく樹立されたことになってしまうであろう。

(答え:) 確かにその通りかもしれない (bden mod)⁵⁷。我々にはそのような疑念はないけれども、理論の枢要を正しく学んでいないある者達は、妥当な認識が増益を断じる仕方をジャコウジカの牙 (gla ba'i mche ba) のようなものと認めているので⁵⁸、彼らに向かって君こそが答えたまえ。

⁵³ 肯定的遍充が確定されたとき、「作られたもの」を主題として「作られたものはあらゆる種の常住性 (壺の常住性、音声の常住性、虚空の常住性など) を欠く」ということは理解されるが、「音声」を主題として「音声は常住性を欠く」ということが理解されるわけではないので、上で提起されるような過失はない (L, Nov. 26th 2010)。

⁵⁴ 例えば壺〔でないものから〕の異なり (bum pa'i ldog pa)、壺との同一性 (bum pa dang gcig)、壺の定義 (bum pa'i mtshan nyid)、壺の特質 (bum pa'i khyad chos) といったものは全て常住であり、毎瞬間に変化することがないものである (L, Nov. 26th 2010)。

⁵⁵ 例えば虚空の常住性 (nam mkha'i rtag pa) などである。虚空 (nam mkha') は常住のものであるが、「常住」という概念によって特徴付けられる常住なものではない。なぜなら「虚空」という名称の中に「常住」という語は含まれないので、虚空は「常住」という概念による特徴付け (rtag pa'i ldog pas khyad par du byas pa) を欠くからである。一方、壺の常住性 (bum pa'i rtag pa) は「常住」という概念によって特徴付けられるものであるが、常住なものではない。なぜなら、壺は常住ではないので「壺の常住性」なるものは存在しないからである (L, Nov. 26th 2010)。

⁵⁶ 例えば音声は「虚空の常住性」を有すると捉える増益などである。

したがって、その拒斥推理によって常住なものは所作性一般 (byas pa tsam) を欠くと確定されるとき、その概念によって特徴付けられる全ての種を欠くことが必ず確定される⁵⁷。

類を欠くことが知られば種を欠くことも知られるか [24b3]

(反論：) もし類 (spyi) に関する増益が断じられるならば、類によって限定された全ての種 (bye brag) に関する増益は断じられるけれども、類を欠くことが確定されたからといって、それによって限定された全ての種を欠くことは必ずしも確定されないのではないか。

(答え：) 全てにわたって対応しているのであるから、君は正しく弁別したまえ。もし「垂れ下がったシンシャパー (sha pa sgur skyog po) —主題—は樹である。樹である所のシンシャパーであるゆえに」というのが有効な証因であると認めた場合⁵⁸、いかなる過失があるであろうか⁵⁹。

(反論：) [あるものを] 樹でもあり、かつシンシャパーでもあるもの(「樹」と「シンシャパー」の共通基体)と確定したならば[それが] 樹であると確定されないのは矛盾するので、証因が成立すれば論証対象に関して疑惑が起らないことになってしまう。

(答え：) ならば、音声が無常であることを知るその妥当な認識によって、音声でもあり、かつ常住でもあるものはあり得ないと確定された後、音声でもあり、かつ東にある常住なもの (shar na yod pa'i rtag pa) でもあるものはあり得ないと確定されないのは矛盾するので、類を欠くことが確定されれば種を欠くことも必ず確定されることが成立する。

肯定的遍充の把握と否定的遍充の把握に関する疑問 [25a1]

(反論：) もしそうであるならば、「あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではない (rtag na byas pa ma yin pa'i khyab pa)」と確定されるとき、「あるものが作られたものであるならば、それは必ず無常である (byas pa yin na mi rtag pa yin pa'i khyab

⁵⁷ ここでは反論者によって批判される見解にこそ過失があり、反論者の見解の方が正しいという珍しい現象が生じている。おそらくゲェルツァブジェにとって「常住性一般が否定されたからといって全種の常住性が否定されるとは限らない」というのは敢えて取り上げる価値もない程に誤った見解であるため、反論者の口を借りてその見解に言及させるという論述形式が取られたのであろう。

⁵⁸ ジャコウジカは細い牙を使って狭い領域の草しか食べることができない。ちょうどそのように、妥当な認識 (tshad ma) が生じたとしても、その認識によって僅かな増益しか断じることができないと「ある者達」は考えている (L, Nov. 26th 2010)。

⁵⁹ 拒斥証因を用いた論証を通じて「常住なものは所作性を欠く」ということが確定されるならば、常住なものは「音声の所作性」「柱の所作性」「虚空の所作性」といったあらゆる種の所作性—「虚空の所作性」のように実際には存在しないものも含めて—を欠くことが確定される。かくして、一つの妥当な認識 (tshad ma gcig) によって幾つもの増益 (sgro dogs du ma) が断じられる (L, Nov. 26th 2010)。

⁶⁰ この直後で提起される反論にも示されるように、実際にはこれは有効な証因ではない。なぜなら、主題「垂れ下がったシンシャパー」が「樹である所のシンシャパーであること」を確定した後、なおもそれが樹であるか否か疑念を持つことはあり得ず、証因が知られた時点で必ず論証対象も知られることになるので、この証因を適用しても分かりきったことの証明にしかならないからである (L, Nov. 26th 2010)。

pa)」ということも確定されるので、肯定的遍充を確定するのに幾つの認識が必要か考察した箇所と矛盾するではないか⁶¹。

(答え：) 同じではない。もし「あるものが」常住であると確定される時「それは」必ず作られたものでないことも確定されるはずだと仮定するならば、「あるものが」作られたものであると確定される時「それが」無常であることも確定されるはずであるということは認められる。けれども、「実際にはその仮定は正しくなく」「あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではない (rtag na byas pa ma yin pa'i khyab pa)」と確定されたからといって、必ずしも「あるものが作られたものであるならば、それは必ず無常である (byas pa yin na mi rtag pa yin pa'i khyab pa)」と確定されるとは認められない。

K3 三つの相が同一の本体のものであるか、本体を異にするものであるかについての説明 [25a3]

第三について二点より説明する。すなわち、L1他説の否定、L2正しい主張の規定。

L1 他説の否定 [25a3]

第一について M1具体的内容(mtshan gzhi)〔に関する他説〕の否定、M2定義(mtshan nyid)〔に関する他説〕の否定〔の二点より説明する〕。

⁶¹ もし反論者の考えが正しいとするならば、目下の主題が「樹である所のシンシャパーではないこと」を欠く (shing du gyur pa'i sha pa ma yin pas stong pa) と確定されても、それが「樹ではないこと」を欠く (shing ma yin pas stong pa) とは必ずしも確定されないので、上のような証因が有効であることになる。というのも、「樹である所のシンシャパーでないもの (shing du gyur pa'i sha pa ma yin pa)」は類 (spyi) であり、「樹でないもの (shing ma yin pa)」はそれに属する種 (bye brag) だからである。では、この両者の内、なぜ前者が類であり、後者が種であるのか。それは [1]「樹でないもの」は「樹である所のシンシャパーでないもの」であり、[2]「樹でないもの」は「樹である所のシンシャパーでないもの」との間に同一関係を有しており、[3]樹でないものでないものであり、なおかつ、樹である所のシンシャパーでないもの (shing ma yin pa ma yin zhing shing du gyur pa'i sha pa ma yin pa'i gzhi mthun pa) は複数存在するから (例えば梅檀の樹など) である。なお、「樹でないもの」が類であり、「樹である所のシンシャパーでないもの」がそれに属する種であるということとは言えない。なぜなら、もし仮にそうであるならば、樹である所のシンシャパーでないものでないものであり、なおかつ、樹でないもの (shing du gyur pa'i sha pa ma yin pa ma yin zhing sha pa ma yin pa'i gzhi mthun pa) が複数存在しなければならないが、そうした事例は存在しないからである (L, Nov. 26th 2010)。

⁶² 反論者の見解によれば、当該の論証における否定的遍充は「あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではない (rtag na byas pa ma yin pa'i khyab pa)」というものであり、肯定的遍充は「あるものが作られたものであるならば、それは必ず無常である (byas pa yin na mi rtag pa yin pa'i khyab pa)」というものである。そして、否定的遍充が確定されれば、同時に肯定的遍充も確定されるという前提から、反論者は前者の包摂関係が知られれば後者の包摂関係も知られるはずなので、肯定的遍充を確定するのに先だって「あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではない」ということを確定しなければならないというのは不合理ではないか、と考えるのである。

M1 具体的内容に関する他説の否定 [25a3]

第一。〔ある者は〕次のように言う。

同類例を適用した論証式⁶³で直接に語られる「およそ作られたものは必ず無常であること」が肯定的遍充〔の具体的内容〕であり、異類例を適用した論証式⁶⁴で直接に語られる「およそ常住なものは決して作られたものでないこと」、すなわち〔虚空〕などといった異類例に基づいてその成立が語られるものが否定的遍充の具体的内容なのであって、その二つの特定の事柄 (ldog pa de gnyis)⁶⁵より他に目下の論証式における遍充の具体的内容は存在しない。

しかし、もしそうであるならば、証因「効果的事物 (dngos po) であること」に基づいて「聞かれる対象である効果的事物 (mnyan bya'i dngos po) が無常であること」を論証する際の肯定的遍充を確定する知は、論証対象を確定する知であることに必ずなってしまう。なぜなら「およそ効果的事物であるものは必ず無常である」と確定する知は必ず「およそ常住なものは決して効果的事物ではない」と確定する知でもあるはずであり、その〔知〕は必ず「およそ常住なものは決して聞かれる対象である効果的事物ではない」と確定する知でもあるはずであり、その〔知〕は必ず「およそ聞かれる対象である効果的事物は必ず無常である」と確定する知でもあるはずだからである。前後二つの証因を〔君は〕必ず承認しなければならぬ。〔さもなければ〕「作られたものであること」を根拠に「音声は無常である」と論証する際の肯定的・否定的遍充の具体的内容は上述のそのみであって、それとは別の特定の事柄 (de las ldog pa gzhan) を捉えるのは不合理である〔という君の見解〕と矛盾するであろう。

また、「作られたものであること」を根拠に「音声は無常である」と論証する際の否定的遍充は、必ずしも異類のみにおいて成立するとは限らないことが〔君の主張に反して〕

⁶³ 例えば「およそ作られたものは必ず無常である。例えば壺のように。音声もまた作られたものである」といった、同類例「壺」を適用した論証式のことである。

⁶⁴ 例えば「およそ常住なものは決して作られたものでない。例えば虚空のように。音声は作られたものである」といった、異類例「虚空」を適用した論証式のことである。

⁶⁵ すなわち、「およそ作られたものは必ず無常であること」と「およそ常住なものは決して作られたものでないこと」である。

⁶⁶ ここで想定されるのは「聞かれる対象である効果的事物は無常である。効果的事物であるゆえに (mnyan bya'i dngos po chos can / mi rtag ste / dngos po yin pa'i phyir //)」というものである。主題「聞かれる対象である効果的事物」を *A*、論証されるべき属性「無常であること」を *B*、証因「効果的事物であること」を *C* と記号化すれば、反論者は肯定的遍充を $C \rightarrow B$ という関係のことであると考え、否定的遍充を $\neg B \rightarrow \neg C$ という関係のことであると考えている。肯定的遍充が知られれば否定的遍充も間接的に知られるので、 $C \rightarrow B$ が知られれば $\neg B \rightarrow \neg C$ も知られるはずである。さらに、あるものが $\neg C$ であることは、それが $\neg A$ であることを含意するので、 $\neg B \rightarrow \neg C$ が知られることにより、 $\neg B \rightarrow \neg A$ が知られることになる (24b3ff. で既に議論された通り、類を欠くことが知られれば種を欠くことも知られる)。そして、反論者の考えにしたがえば、 $\neg B \rightarrow \neg A$ が知られれば、その対偶に当たる $A \rightarrow B$ も知られるはずなので、肯定的遍充が知られただけで結論が知られることになってしまう。

帰結する。なぜならその〔論証における〕否定的遍充の意味する事柄 (don ldog) は必ずしもその〔異類〕のみにおいて成立するとは限らないゆえに。もし〔上の帰結を〕その通りであると認めるならば、否定的遍充の具体的内容 (mtshan gzhi) がその特定の事柄 (ldog pa) のみに尽きる〔という最初の君の主張〕が損なわれることになる。

証因が成立しないというならば、「作られたものであること」が「音声は無常である」という論証における不確定因であることを否定するために、それを論証するための異類例を適用した論証式を述べるのは不合理であることになってしまう。なぜなら〔もし君の主張が正しいならば〕音声が無常であることを論証する際の否定的遍充の定義 (mtshan nyid) を充たすものであれば、それが「作られたものであること」において提示様式に見合った形で (god tshul ltar) 成立するのは矛盾する〔ことになってしまう〕からである⁶⁷。

矛盾因、不確立因、不確定因の三つが有効な証因であることを否定するために、三相の定義の中で「確定」ということを言及するのであると認めるのは世迷い言である⁶⁸。もしそうであるならば、「作られたものであること」は「無為虚空が壺であること」を否定する証因であると承認したとしても過失がないことになってしまうであろう⁶⁹。

M2 定義に関する他説の否定 [25b5]

否定的遍充は異類例のみにおいて成立するという説 [25b5]

第二。否定的遍充の定義として「当該の論証における遍充の相であり、なおかつ二種の喩例の内では異類例のみにおいて成立するもの」というものを措定し、肯定的遍充を「同類例のみにおいて成立するもの」と措定する⁷⁰のは考察に耐えないものであるので、智慧を

⁶⁷ 反論者の見解にしたがえば「およそ常住なものは決して作られたものでないこと」が当該の論証における否定的遍充の具体的内容である。そして、彼の考えでは「およそ常住なものは決して作られたものでないこと」は異類例においてのみ成立するのであって、同類に含まれる「作られたもの」においては成立しない。しかし、そのような場合、否定的遍充は証因において成立しないことになってしまうので、証因は否定的遍充を充たさないことになり、また、対論者に向けて否定的遍充を明らかにした上で証因が不確定因ではないことを示すという努力が無意味になってしまう。

⁶⁸ 三相の定義の中で「確定」という語が用いられるのは、「音声は無常である」ということを論証するために適用される証因「作られたものであること」が矛盾因、不確立因、不確定因のいずれかであることを否定するためであって、矛盾因、不確立因、不確定因の三つが有効な証因であることを否定するためではない (L, Nov. 26th 2010)。

⁶⁹ ここで想定される論証は「無為虚空は壺ではない。作られたものであるゆえに (dus ma byas kyi nam mkha' chos can / bum pa ma yin te / byas pa'i phyir //)」というものである。もし三相の定義の中の「確定」という語に、証因「作られたものであること」が矛盾因、不確立因、不確定因のいずれかであることを否定する働きがないとするならば、こうした不合理な論証における証因が有効な証因であることになってしまうということである。

⁷⁰ 肯定的・否定的遍充をこのように定義するならば、それらは本体を異にするもの (ngo bo tha dad) であることになる。というのも、「音声は無常である。作られたものであるゆえに」という論証式を例に取れば、肯定的遍充は「壺」などの同類例にしか成立せず、否定的遍充は「虚空」などの異類例にしか成立しないからである。ギェルツァブジェ自身の見解では、肯定的遍充と否定的遍充は同一の本体のもの (ngo bo gcig) であり、いずれも「作られたものであること」という共通の基盤において成立する。

具えた者達は以下のことについて正しく回答を考えてみるが良い。

否定的遍充が異類例のみにおいて成立することが成立しない事例 [25b6]

「知の対象領域となされ得ること」を根拠に壺が認識対象であることを論証する際の否定的遍充は成立し得ないことになる。その論証における二種の喩例の内、異類例のみにおいて成立するということがあり得ないゆえに⁷¹。

有効な証因の定義について [26a1]

(立論者：) 有効な証因の定義 (mtshan nyid) はいかなるものであるか。事例 (mtshan gzhi) は何であるか。

(対論者：) 「作られたものであること」を実例として〔それを〕音声の無常性を確立する有効な証因と定める (mtshon pa) 場合、当該の論証における三相を完備した証因 (de sgrub kyī tshul gsum tshang ba'i gtan tshigs) というのが〔有効な証因の〕定義である。

(立論者：) ならば、「作られたものであること」において「当該の論証における三相の完備」〔という条項〕は成立しないことになる。〔「作られたものであること」においては〕三相が成立しないゆえに⁷²。もし証因が不成立であるというならば、否定的遍充は必ず異類例のみにおいて成立するという〔君の主張〕が損なわれることになる。

(対論者：) 当該の論証における三相が妥当な認識を通じて確定されたもの (de sgrub kyī tshul gsum tshad mas stobs kyis nges pa) というのが〔有効な証因の〕定義である。

(立論者：) ならば、優れた論者 (rgol ba yang dag)⁷³—主題—は音声の無常性を確立する有効な証因であることになる。当該の論証における三相を妥当な認識を通じて確定してい

⁷¹ ここで想定される論証式は「壺は認識対象である。知の対象領域となされ得るゆえに (bum pa chos can / shes bya yin te / blo'i yul du bya rung yin pa'i phyir)」というものである。ゲルツァブジェの自説にしたがえば、ここでの否定的遍充（すなわち、否定的な様式で所立法によって遍充されるもの）は「知の対象領域となされ得ること」である。反論者の考えによれば、否定的遍充は異類例のみにおいて成立するものであるが、「知の対象領域となされ得ること」は同類例（認識対象である「壺」や「虚空」など）において成立するので、当該の論証における否定的遍充が成立しないことになり、それゆえ、証因は有効でないことが帰結してしまう (L, Nov. 26th 2010)。あるいは、今の議論を次のように解釈することもできる。反論者は「およそ認識対象でないものは決して知の対象領域ではない (shes bya ma yin na blo'i yul du bya rung ma yin pas khyab)」という関係を否定的遍充と捉えた上で、その否定的遍充は異類例のみにおいて成立すると主張するかもしれない。しかし、「認識対象でないもの」は存在しないので、当該の論証式における異類例そのものが成立し得ない。それゆえ、否定的遍充が異類例において成立するとはいえず、証因は否定的遍充を充たさないことになる。あるいはまた、「およそ認識対象でないものは決して知の対象領域ではない」という論理関係そのものは同類例においても成立する（実際には音声は認識対象であるが、「もし音声は認識対象でないならば、音声は知の対象領域ではないことになる」という論理は成立する）と考えれば、否定的遍充が異類例のみにおいて成立するとはいえないことになるので、否定的遍充は確立されないことになる。

⁷² もし君の言う通りならば、否定的遍充は異類例にのみ成立するので、異類例に含まれない「作られたもの」においては成立しないことになり、その結果、証因は三相を完備しないことになる（すなわち、第三相を欠く）という意味である (L, Nov. 27th 2010)。

る (de sgrub kyi tshul gsum tshad mas stobs kyis nges pa) ゆえに⁷⁴。

(対論者:) 「～確定された証因 (nges pa'i gtan tshigs)」とすることにすれば過失はない。

(立論者:) ならば、「音声の無常性の論証における三相—主題—は妥当な認識を通じて確定されたものである。それは妥当な認識を通じて認識されたものであるゆえに」という〔論証式を〕提示した場合、それ〔それは妥当な認識を通じて認識されたものであるゆえに〕という証因〕は音声の無常性を確立する有効な証因であることが帰結してしまうであろう⁷⁵。

否定的遍充の具体的内容について [26a4]

(立論者:) 異類例のみにおいて成立するという否定的遍充の具体的内容は何かであるか。

(対論者:) あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではないという遍充 (rtag na ma byas pas khyab pa'i khyab pa) がそれである。

(立論者:) ならば、壺—主題—においては「常住であるならば作られたものでないこと」が成立し得ないことになる。あるものが常住であるならばそれは決して作られたものではないという遍充は、それにおいて成立し得ないゆえに。この〔証因〕が不成立であるというならば、壺においてその遍充が存在することになる。しかし、そうした場合、「あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではない」というその遍充が無為虚空〔などの異類例〕のみにおいて存在するという〔君の主張〕が損なわれる。もし「常住であれば作られたものでないこと (rtag na ma byas pa)」と「〔常住であれば〕決して作られたものではないという遍充 (ma byas pas khyab pa'i khyab pa)」とが壺において存在するかどうか区別を立てようとでもいうならば、兎の角の頂きで結跏趺坐を組むようなものに過ぎない⁷⁶。

⁷³ 証因の三相を既に確定しており、今まさにその証因に依拠して推理を起こそうとしている段階の者である。後代のゲルク派の著作ではしばしば「優れた対論者 (phyi rgol yang dag)」と呼称される。論証は「優れた対論者」にとってこそ有効なものである。

⁷⁴ この対論者は de sgrub kyi tshul gsum tshad mas stobs kyis nges pa というチベット語を「当該の論証における三相が妥当な認識を通じて確定されたもの」という意味で用いているはずであるが、ゲェルツァプジェは意味を曲解して「当該の論証における三相を妥当な認識を通じて確定した者」と解釈し、詭弁とも取れる論難を投げかけている。

⁷⁵ この論証式における証因は「音声の無常性の論証における三相は妥当な認識を通じて認識されたものであること」である。「音声の無常性の論証における三相は妥当な認識を通じて認識されたものであること」という証因 (sgra mi rtag par sgrub pa'i tshul gsum tshad mas stobs kyis nges pa'i gtan tshigs) は、音声の無常性の論証における三相が妥当な認識を通じて認識された所の証因 (...nges pa'i gtan tshigs) であるので、その証因は定義上、音声の無常性を確立する有効な証因であることになるのではないかと、という反論である。これは nges pa'i に含まれる属格助辞 -i の多義性 (「～という」「～の」) を利用した詭弁である。

⁷⁶ もし対論者が「壺において『常住であれば作られたものでないこと』は成立するが、壺において『常住であれば決して作られたものではない』という遍充は成立しない」と主張するならば、「兎の角は成立しないが、兎の角の頂きで結跏趺坐を組むことは成立する」といった不合理なことを述べているのに等しい (L, Nov. 27th 2010)。

『量評釈』I.28の意味について [26b1]

(対論者：) 必ずしもそのようなことはないけれども⁷⁷、あるものが常住であるならば、それは決して作られたものではないという遍充 (rtag pa la ma byas pas khyab pa'i khyab pa)こそが〔否定的遍充の具体的内容〕である。

(立論者：) 異類例「虚空」においてその遍充を直接的に認識する妥当な認識—主題—は、異類例「虚空」において当該の論証式における肯定的遍充を直接的または間接的に確立していることになる。否定的遍充を直接的に認識しているゆえに。もしその通りであると認めるならば〔君の先程の発言と〕矛盾することになる。また、遍充が成立しないというならば、〔『量評釈』I.28の〕「論理的要請に基づいて他方も…」⁷⁸ということの意味は何であろうか。

(対論者：) 異類例において二種の遍充を直接的、間接的に認識するという意味ではなく、否定的遍充が異類例のもとにおいて存在することが直接的に認識されれば、肯定的遍充が同類例という別の基体 (gzhi gzhan) のもとにおいて存在することが間接的に確立されるという意味である。

(立論者：) ならば、南方に虎がいるのを認識する妥当な認識は、北方にドン（ヤクの種類）がいるのを認識する妥当な認識であることになるだろう。

(対論者：) 単独の認識によって〔肯定的・否定的遍充が〕認識されるのではなく、肯定的遍充を認識する妥当な認識によってそれが異類例において認識されたならば、肯定的遍充を確定する妥当な認識によって同類例において肯定的遍充が確定されるという意味である。

(立論者：) ならば、壺の把握によって壺が認識されるのは、布を把握する妥当な認識の間接的理解であるという〔のも正しいことになるが、そのような君の〕考えは、未だかつてないものである。

「作られたものであること」が肯定的・否定的遍充であるということの意味 [26b5]

(対論者：) ならば、君にとって二つの相（肯定的遍充と否定的遍充）の具体的内容は何であるのか。

(立論者：) 「作られたものであること」が両方の相の具体的内容として適合する。

(対論者：) ならば、「作られたものであること」—主題—を直接的に知るならば、必ずその「作られたものであること」を間接的にも知ることになる。それは当該の一つの論証式における肯定的遍充であり、また、「作られたものであること」はそれにおける否定的遍充でもあるゆえに。証因は承認済みである。だが、その通りであると認めるのは不合理である。というのも、単一の特定の事柄 (ldog pa gcig) が直接的にも間接的にも〔知られる〕のは矛盾するからである。

⁷⁷ 壺において「常住であるならば作られたものでないこと」は成立し得ないのではないけれども、という意味である。

⁷⁸ PV I 28からの引用。PV I 28: tena eva jñātasambandhe dvayor anyataroktitaḥ / arthāpattā dvitīye api smṛtiḥ samupajāyate // (「まさにそれゆえ、〔論証されるべき属性との〕関係が知られている〔証因〕の場合には、両者の内の一方が言明されれば、論理的要請を通じて他方も想起される。」)

(立論者:) 遍充が成立しない。二種の論証式によってそれぞれ直接的に言明される二種の遍充は〔一方が〕直接的に知られるものであれば〔他方を〕間接的に知らしめるものであるけれども、あるものが二つの相(肯定的遍充と否定的遍充)であるからといって、そうであるわけではないからである⁷⁹。

L2 正しい主張の規定 [27a1]

『量評釈』I.28の解釈 [27a1]

第二。上述のように〔肯定的・否定的遍充という〕二つの遍充は、一方が直接的に確定されれば〔他方も〕間接的に確定されるという点において、相互的に逸脱しないもの(phan tshun mi 'khrul ba)である。これが〔『量評釈』I.28の〕典籍の意味である。

肯定的・否定的遍充の言明について [27a1]

主題所属性を言明する前に〔同類例もしくは異類例という〕二種の喩例に基づいて直接的に述べているもの⁸⁰は、〔論証されるべき属性と証因の間の〕必然的關係それ自体(rang ldog)と、その意味の一部(don ldog gi phyogs gcig)を⁸¹、遍充を確定する要因となるように述べたものなのであって、各々だけを通じて論証式で直接的に述べられるべき遍充が完全〔に述べられるの〕ではない。それが〔完全な形で〕明示されるかどうかは証因の実例(rtags kyi mtshan gzhi)を言明することに必ず懸かっている。すなわち、「作られたものであること」を主題として捉えた上で〔それが〕同類にのみ存在すること、および、異類には存在しないことが語られるべきであって、さもなければ、先述のようなそれらの過失を断じることができないであろう。

(反論:) ならば、「およそ常住なものは作られたものではない。例えば無為虚空のよう

⁷⁹ 同類例を提示する論証式の中で言明される「およそ作られたものは無常であること」が知られるとき、そのことが「およそ常住なものは作られたものでないこと」を間接的に知らしめる。また、異類例を提示する論証式の中で言明される「およそ常住なものは作られたものでないこと」が知られるとき、そのことが「およそ作られたものは無常であること」を間接的に知らしめる。ゲェルツァプジェの見解では、証因「作られたものであること」こそが当該の論証における肯定的遍充でもあり、否定的遍充でもあるのだが、肯定的遍充に相当するものが直接的に知られるからといって、否定的遍充に相当するものが間接的に知られるというわけではない。というのも、さもなければ、「作られたもの」が直接的に知られるとき、まさにその同じ「作られたもの」が間接的にも知られるといったことになってしまうからである(L, Nov. 27th 2010)。

⁸⁰ 同類例に基づいて述べられるのは「およそ作られたものは無常である。例えば壺のように」といった言明であり、異類例に基づいて述べられるのは「およそ常住なものは作られたものでない。例えば虚空のように」といった言明である。主題所属性の言明とは「音声は作られたものである」というものである(L, Nov. 27th 2010)。

⁸¹ 「およそ作られたものは無常である。例えば壺のように」という言明によって、無常性と所作性の必然的關係それ自体('brel ba'i rang ldog)が述べられたことになり、「およそ常住なものは作られたものでない。例えば虚空のように」という言明によってその関係の意味の一部('brel ba'i don ldog gi phyogs gcig)、すなわち、無常性がなければ所作性もないこと(mi rtag pa ldog stobs kyis byas pa ldog pa)が述べられたことになる。

に」というだけで否定的遍充の言明が完遂することになる。それによって常住なものにおいて所作性は存在しないと述べられているゆえに。

(答え:) そうではない⁸²。「音声は作られたものである」という証因の実例の言明も併せて二つを組み合わせた上で、「作られたものであること」を主題として捉えて「常住なものにおいて作られたものであること(所作性)は存在しない」と言明することが必要である⁸³。それゆえ、証因の実例を言明することなしには、肯定的・否定的遍充が完全な形で言明されることはあり得ない。

妥当な認識が起こる仕方(tshad ma'i jug tshul)と言葉で表現される仕方(sgra'i brjod tshul)は同じでない。言葉の上では「作られたものであること」を直接的に述べた後、常住なものにおいてそれは存在しないと言明することによってこそ、当のそれは常住なものには存在しないということが知られるのである⁸⁴。

肯定的・否定的遍充の二者の関係 [27a6]

肯定的遍充と否定的遍充を「相互的排除の対立という仕方で直接対立するもの(phan tshun spang gal gyi dngos gal)」⁸⁵であると認めるのもまた、論理の道から逸脱しているように見受けられる。[もしその考えが正しいならば]「作られたものであること」という基体

⁸² ギェルツァブジェは「およそ常住なものは作られたものではない」という言明と「作られたものであること(所作性)は常住なものに存在しない」という言明を全く別々のものと見なしている。というのも、この二つの言明は主題(khyad gzhi)が異なるからである。否定的遍充を完全な形で言明するためには、後者のように、目下の証因である「作られたものであること」を主題として立てなければならない。

⁸³ 肯定的遍充を完全に言明するためには、「およそ作られたものは無常である。例えば壺のように」という言明に加え、「音声は作られたものである」という主題所属性の陳述が必要である。同様に、否定的遍充を完全に言明するためには、「およそ常住なものは作られたものではない。例えば虚空のように」という言明に加え、「音声は作られたものである」という主題所属性の陳述が必要である(L, Nov. 27th 2010)。

⁸⁴ 認識的な観点から言えば、「およそ常住なものは作られたものではない。例えば虚空のように」という内容が知られた後に、否定的遍充を把握する認識が起こることはあり得る。しかし、言葉の上では「作られたものであること」を主題として立て、「作られたものであること(所作性)は常住なものには存在しない」と述べない限り、否定的遍充が表現されたことにはならない。

⁸⁵ 壺と非壺のように、一方が除外(rnam bca'd)されれば必ず他方が定立(yongs gcod)されるという間柄にあり、なおかつ、両者のいずれでもない第三の可能性があり得ないならば、その二者は「相互的排除の対立という仕方で直接対立するもの」である。ガワンタシの『セドゥラ』によれば、常住性と所作性は「相互的排除の対立という仕方で間接的に対立するもの(phan tshun spang gal gyi brgyud gal)」である。というのも、およそ作られたものは無常であり、無常性と常住性は直接対立することから、所作性と常住性は対立する(gal ba)と言えるけれども、ある主題が作られたものであると知られたからといって、必ずしもそれが常住でないと知られるとは限らないからである(Sras bsdu's grwa, 308.17ff.)。つまり、ガワンタシの説明にしたがえば、二つのものが存在的な観点から見て両立し得ないことを「相互的排除の対立」と言い、その両立不可能性が誰にでも知られるならば、その二つは「相互的排除の対立という仕方で直接対立するもの」であり、両立不可能性が必ずしも知られるとは限らない場合、その二つは「相互的排除の対立という仕方で間接的に対立するもの」である。

において肯定的遍充があると確立することにより、否定的遍充も間接的に確立するなどといった仕方で相互的に逸脱しないもの(phan tshun mi 'khrul ba)ではないことになる。もし〔二種の遍充は相互的に逸脱しないという帰結を〕その通りであると認めるならば、肯定的遍充しか成立しない証因や、否定的遍充しか成立しない証因を認める〔非仏教徒の〕考えが否定され得ないことになってしまうであろう。

(反論:) 同類例に基づいて肯定的遍充が成立すると知られるならば、異類例に基づいて否定的遍充が成立することも間接的に知られることが「逸脱しないこと」の意味である。

(答え:) ならば、無為虚空は常住であると直接的に知られれば、音声は無常であるということも間接的に知られることになってしまう。〔君が提示した〕その証因のゆえに。その通りであると認めるなら、君の考えによれば、その論証式における否定的遍充が確立すれば、論証対象までもが確立することになってしまうであろう。

二種の遍充を別建てすることの意味 [27b3]

したがって、〔師ディグナーガが〕『集量論』において

「〔三相とは〕推理対象とそれに類似するものには存在し、〔推理対象を〕欠くものには存在しないと確定されること (nges pa)⁸⁶である。」⁸⁷

と仰っているのは三相の定義を明示したものであるが、三つの相のいずれもが証因において成立するのでないならば、「同類のみに存在すると確定されれば、異類には存在しないことも確立済みであるので、否定的遍充を別建てして述べるのは無意味であることになるのではないか」という反論への回答が脈絡のないものとなってしまうであろう。

〔肯定的遍充と否定的遍充が〕別々の相 (tshul tha dad) として説かれるのは、それぞれの特徴を直接的もしくは間接的に理解せしめるような相異なる論証式が二つあることを言っているのであって、相矛盾する (gal ba) と言っているのではない。〔師ダルマキールティの〕『正理一滴』に

「随伴と排除は相互的に排除し合うものだからである。」⁸⁸

とあるのは、「氣息を有すること」が無我なものから排除されるならば、必ず我(アートマン)に随伴するはずであり⁸⁹、もしそうであるならば、我に随伴するものでもあり、かつ我から排除されるものでもあるのは矛盾するということ、そしてまた、同様のことを異類にも適用して説示しているのである。それゆえ、二種の遍充が相矛盾することの論拠であ

⁸⁶ ギェルツァブジェは『集量論』を “rjes dpag bya dang de mtshung la // yod dang med la med par ni // nges pa” という形で引用する。しかしながら、『集量論』の二種のチベット語訳 (Katsura 2000: 243を参照) のいずれにも nges pa (Skt. niścita) という語は存在しないので注意を要する。むしろ、ギェルツァブジェが引用する句はダルマキールティの『量決択』II 9a-c' に一致するものである (Steinkellner 1988: 1433ff. を参照)。

⁸⁷ PS II 5cd (cf. Katsura 2000: 244): anumeye 'tha tattulye sadbhāvo nāstitāsati //

⁸⁸ NB III 107: anvayavyatikarāy anyonyavyavacchedarūpatvāt /

⁸⁹ ここでギェルツァブジェが想定しているのは、アートマン論者が立てる「生きた身体は有我である。氣息を有するゆえに (gson lus chos can / bdag dang bcas pa yin te / srog ldan yin pa'i phyir)」という論証式である。

るとするのは全く脈略がないことである。

Abbreviations and Literature

(1) 一次文献

- Thar lam gsal byed* *Tshad ma rnam ġrel gyi tshig le'ur byas pa'i rnam bshad thar lam phyin ci ma log par gsal bar byed pa* (rGyal tshab rje dar ma rin chen): Zhol ed. Cha. Tohoku No. 5450.
- sDe bdun rgyan* *Tshad ma'i bstan bcos sde bdun rgyan yid kyi mun sel* (mKhas grub rje dge legs dpal bzang po): Zhol ed. Tha. Tohoku No. 5501.
- NB** *Nyāyabindu* (Dharmakīrti): see NBṬ.
- NBṬ** *Nyāyabinduṭkā* (Dharmottara): P. D. Malvania ed. *Pañḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa*. Tibetan Sanskrit Works Series. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute. 1955, 2nd ed. 1971, reprint 2005.
- rNam ġrel mtha' dpyod* *Tshad ma rnam ġrel gyi mtha' dpyod thar lam rab gsal tshad ma'i òd brgya 'bar ba las le'u dang po'i mtha' dpyod blo gsal mgul rgyan skal bzang jug ngogs* ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson ġrus): bKra shis 'khyil ed. Pa.
- rNam nges țikka chen* *bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi țikka chen dgongs pa rab gsal gyi stod cha* (rGyal tshab rje dar ma rin chen): Zhol ed. Ja. Tohoku No. 5453.
- rNam bshad snying po rgyan* *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi ġrel pa don gsal ba'i rnam bshad snying po'i rgyan* (rGyal tshab rje dar ma rin chen): Zhol ed. Kha. Tohoku No. 5433.
- PV** *Pramāṇavārttika* (Dharmakīrti): Y. Miyasaka ed. *Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan)*. *Acta Indologica* 2 : 1 -206. 1971-72.
- PVSV** *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti): R. Gnoli ed. *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocomentary, text and critical notes*. Serie Orientale Roma 23. Rome. 1960.
- Tshad ma'i brjed byang* *rGyal tshab rjes rje'i drang du gsan pa'i tshad ma'i brjed byang chen mo* (Tsong kha pa blo bzang grags pa/rGyal tshab rje dar ma rin chen): *rJe tsong kha pa chen po'i gsung 'bum*, Pha. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 1987.
- Rigs rgyan* *Tshad ma'i bstan bcos rigs pa'i rgyan* (rGyal ba dge ðun grub): 'Bras spungs dga' ldan pho brang ed. Nga.
- Sras bsdus grwa* *Tshad ma'i dgongs ġrel gyi bstan bcos chen po rnam ġrel gyi don*

gcig tu dril ba blo rab 'bring tha ma gsum du ston pa legs bshad chen po mkhas pa'i mgul rgyan skal bzang re ba kun skong (Thugs sras ngag dbang bkra shis). Mi rigs dpe skrun khang. 1985.

(2) 二次文献

Katsura, Shoryu (桂紹隆). 2000.

“Dignāga on *trairūpya* Reconsidered: A Reply to Prof. Oetke.”
『インドの文化と論理 戸崎宏正博士古稀記念論文集』所収
(pp. 241-66) 九州大学出版会

Nemoto, Hiroshi (根本裕史). 2011.

『ゲルク派における時間論の研究』平楽寺書店

Id. (forthcoming)

「チベット論理学における遍充概念の発展」『日本西藏学会会報』57 (掲載予定)

Steinkellner, Ernst. 1988.

“Remarks on *Niścitagrahaṇa*.” In *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata* (pp. 1427-44). Rome: Istituto Italiano per il medio ed estremo oriente.

Toyo Bunko 1997

東洋文庫チベット研究室『西藏仏教基本文献 第二卷 *The Collected Sa-bcad of rJe yab sras gsung 'bum* (2)』東洋文庫

A study of rGyal tshab rje dar ma rin chen's theory of inference:
An annotated partial translation of the *Thar lam gsal byed*

Hiroshi NEMOTO

This article is an annotated Japanese translation of the *Thar lam gsal byed* (20b6–28a1, Zhol ed) ad *Pramāṇavārttika* I 15, where rGyal tshab rje dar ma rin chen (1364–1432) discusses Dharmakīrti's theory of inference in great detail. The topical outline (*sa bcad*) of the text is as follows (cf. Toyo Bunko 1997: 243f):

F3 Detailed explanation of valid cognition ascertaining the definition [of a valid logical reason] on the basis of an illustration (*mtshan gzhi la mtshan nyid nges byed kyi tshad ma rgyas par bshad pa*) [20b6]

G1 Showing that the establishment of the logical reason's being negatively pervaded [by the property to be proved] relies on the connection (*rtags kyi ldog khyab grub pa 'brel pa la ltos par bstan pa*) [21a1]

H1 Refutation of the view that negative pervasion is established by mere non-perception [of the logical reason] in dissimilar instances (*mi mthun phyogs la ma mthong tsam gyis ldog khyab grub par dod pa dgag pa*) [21a1]

I1 [Showing that] Ācārya Dignāga accepts the view that the establishment of negative pervasion relies on the connection (*ldog khyab grub pa 'brel pa la ltos pa slob dpon phyogs glang bzhed pa*) [21a2]

J1 Meaning of [Dharmakīrti's] statement [in PV I 15] (*tshig don*) [21a2]

J2 Thorough investigation (*mtha' dpyad pa*) [21a5]

K1 Explanation of the way of thinking adopted by those who hold that negative pervasion is established by mere non-perception (*ma mthong tsam gyis ldog khyab grub par dod pa dag gi bsam pa ji ltar bshad pa*) [21b6]

K2 Meaning of [the statement that] the establishment of positive and negative pervasion relies on the connection (*rjes su gro ldog gi khyab pa grub pa 'brel pa la ltos pa'i don*) [22a5]

K3 Explanation of whether three forms [of the valid logical reason] are of the same entity or not (*tshul gsum ngo bo gcig dang tha dad bshad pa*) [25a3]

L1 Refutation of opposing systems (*lugs gzhan dgag pa*) [25a3]

M1 Refutation of [other party's view regarding] illustrations [of three forms] (*mtshan gzhi dgag pa*) [25s3]

M2 Refutation of [other party's view regarding] definitions [of three forms] (*mtshan nyid dgag pa*) [25b5]

L2 Giving a correct interpretation (*'thad pa'i phyogs nam par bzhag pa*) [27a1]